グリフィンズだより八幡山新聞　2020年　第12号　ー松本瀧蔵物語完結編ー

＜松本瀧蔵物語＞**(まつもと たきぞう)(1901～1958)**
ー日本にアメリカンフットボールを誕生させた人ー
広島県出身。1930(S5)明治大学商学部卒業、1930年ハーバード大学留学、その後帰国し明治大学教授。1934年東京学生アメリカンフットボール連盟結成にあたり、理事長のポール･ラッシュ氏を助け書記長に就任。審判としても活躍し、日本で最初の試合に先立つ10月25日、明治大ー在日ハワイ二世軍の主審を務める。1942年、帰国したポール･ラッシュ氏の後を継ぎ、第2代の関東學生連盟の理事長に就任。
衆議院議員、外務政務次官、内閣官房副長官。
2004年(H16)アメリカンフットボール殿堂入り。

＜明治大学なくして、日本のアメリカンフットボールは存在しなかった＞

1934年1月29日の明治神宮外苑競技場。ブラスバンドの演奏に英語の応援と約2万人の観客の完成で競技場はつつまれていた。この日、明治大学・早稲田大学・立教大学の東京学生連合軍と横浜YCACによる日本で最初のアメリカンフットボールの公式戦が開催されたのだ。

この試合には、明治大学松本瀧蔵教授と立教大学のポール・ラッシュ教授とによって実現されたことは有名である。二人はアメフトに必要な資金を捻出するために日本に住むアメリカ人やイギリス人に募金協力を求めながら対戦相手を探した。

募金活動によって、試合に欠かせない防具の準備に目途が立ち開催日と会場が決まった。対戦相手は横浜にある外国人スポーツクラブ横浜YCACが引き受けてくれることに。後は日本の大学チームを準備するだけとなった。立教大学ではプレーできる学生がほとんどいなかったためチーム作りが難航。その一方で、明治大学と早稲田大学はチーム作りが順調に進んだ。

その中でも、明治大学は、経験者が多数参加。公式戦を前に、チーム独自で試合をするなど内容が充実していた。公式戦では、戦力の中核として期待されていた。なぜ明治大学にこれほどの人材が、そろっていたのか？

当時の明治大学には、日系アメリカ人が数十人以上留学していた。アメリカ合衆国に20代まで生活していた松本瀧蔵が、彼らを積極的に大学に受け入れていたのだ。彼らにとって、アメフトは日本における野球のようなもので、誰もがルールを知っていて、普段から広場や公園で気軽に遊ぶスポーツであった。留学生の中にはハワイの高校一流選手として活躍した者も含まれていた。　そのことをよく知っていた松本瀧蔵は日系アメリカ人留学生に試合をするように勧めた。

1934年9月には、彼らが主体となって明治大学アメリカンフットボール部（明治大学グリフィンズ）が結成され、日本最初の公式戦では、東京学生連合軍の主力として活躍し、26対0、で勝利することができたのだ。　その後、彼らを中心とする明治大学アメリカンフットボール部は、大学リーグを通じて、日本のアメフト普及に貢献した。

しかし太平洋戦争開戦で、その後の活動は中断を余儀なくされた。部員の中には、徴兵や学徒出陣で、将校や兵士としてアメリカ軍と日本軍が分れて戦うなど、過酷な体験をしたものもいたという。

戦争が終わり、アメリカ合衆国に帰国した日系アメリカ人留学生に代わって、日本人の学生がアメリカンフットボールを引き継ぎ、現在に至っている。

明治大学体育会アメリカンフットボール部グリフィンズ父母会　発行日：2020年10月22日　発行責任者：山田小百合　編集：西本昭二